

## 立山町 平成 26 年度決算における財務諸表（4 表）の公表について

### 1. 財務諸表整備の背景

平成 18 年 8 月の「地方公共団体における行政改革の更なる推進のための指針」では、地方公共団体においても、発生主義会計による財務諸表の整備が求められ、資産・債務改革に取り組む方向性が示されました。

これまでの会計方式は、単年度ごとの現金収支を基準とした「現金主義」による会計処理を行っていましたが、この方式では、現金支出の伴わないコストが把握できない、将来負担すべき負債が把握できない等の問題が指摘されていました。これに対して、経済的事実の発生を基準とした「発生主義」による会計処理によると、当該団体が保有する資産、負債等の経済的資源を広く表現することができるため、「現金主義」における問題点を解決できるものとなっています。

■対象年度	平成 26 年度（作成基準日：平成 27 年 3 月 31 日）
■作成範囲	普通会計
■作成方法	総務省方式改定モデル
■作成基礎数値	昭和 44 年度以降の決算統計数値をもとに作成

### 2. 貸借対照表（バランスシート）

貸借対照表は、会計年度末における財政状態を表す財務書類です。貸借対照表は、借方（左側）と貸方（右側）に分かれており、借方に資産、貸方に負債と純資産が計上されます。貸方の負債と純資産が財源を示し、借方の資産が貸方で調達した財源をどのように運用しているのかを示しています。

平成 26 年度 立山町 貸借対照表（簡易版）

（単位：千円）

資産の部		負債の部	
	<b>48,577,654</b>		<b>16,003,941</b>
①公共資産	43,875,657	①固定負債	14,471,416
②投資等	2,709,806	②流動負債	1,532,525
③流動資産	1,992,191	純資産の部	<b>32,573,713</b>

当町の平成 26 年度決算における、公共資産、投資等および流動資産の合計である「資産の部」の合計は 48,577,654 千円であり、その内訳として、将来世代の負担を表す「負債の部」が 16,003,941 千円、過去または現役世代がしてきた負担を表す「純資産の部」が 32,573,713 千円となりました。これは、社会資本形成の結果を表す公共資産（48,577,654 千円）のうち、67.1%をこれまでの世代が負担し、32.9%を将来世代が負担していくことを

表しています。

■町民一人あたりの資産及び負債

資産：180万8千円 負債：59万5千円 (H27.3.31 現在人口：26,875人)

■1世帯あたりの資産及び負債

資産：523万7千円 負債：172万5千円 (H27.3.31 現在世帯数：9,276世帯)

### 3. 行政コスト計算書

行政コスト計算書は、一会計期間における、資産形成を伴わない経常的な行政活動に伴う純経常行政コストを表す財務書類です。町の経常的な行政活動の内容を表します。

#### 平成26年度 立山町 行政コスト計算書(簡易版)

	金額 (千円)	構成比 (%)
経常行政コスト (①)	9,382,609	100.0%
1. 人にかかるコスト	1,921,890	20.5%
2. 物にかかるコスト	3,411,829	36.4%
3. 移転支出的なコスト	3,887,345	41.4%
4. その他のコスト	161,545	1.7%
経常収益 (②)	371,266	
純経常行政コスト (①-②)	9,011,343	

行政コスト計算書において、経常行政コストは9,382,609千円で、その内、人件費、退職手当引当金等の「人にかかるコスト」は20.5%、減価償却費、維持補修費等の「物にかかるコスト」は36.4%、補助金や他会計への支出等の「移転支出的なコスト」は41.4%となっています。経常収益は371,266千円であり、経常行政コストから経常収益を差引いた「純経常行政コスト」は9,011,343千円となっています。このことから、町民一人あたりに要する行政コストは33万5千円、1世帯当たり要する行政コストは97万1千円となります。

### 4. 純資産変動計算書

純資産変動計算書は、一会計期間において、貸借対照表の純資産の部に計上されている各項目がどのように変動したかを表す財務書類です。当年度における町の純資産の変動について把握することができます。

平成 26 年度 立山町 純資産変動計算書（簡易版）

	金額（千円）
<b>期首純資産残高</b>	<b>31,768,921</b>
純経常行政コスト	△9,011,343
一般財源	
地方税	3,162,834
地方交付税	3,674,539
その他行政コスト充当財源	740,699
補助金等受入	2,241,552
臨時損益	
災害復旧事業費	△3,489
その他	0
資産評価替えによる変動額	0
<b>期末純資産残高</b>	<b>32,573,713</b>

前年度末の町の純資産（期首純資産残高）に対して、平成 26 年度末の町の純資産（期末純資産残高）が上回っていることから、税収や交付税及び補助金等の受入れにより、純資産が増加したことを表しています。

5. 資金収支計算書

資金収支計算書は、一会計期間における、地方公共団体の行政活動に伴う現金などの資金の流れを性質の異なる三つの活動（①経常的収支 ②公共資産整備収支 ③投資・財務的収支）に分けて表示した財務書類です。

平成 26 年度 立山町 資金収支計算書（簡易版）

（単位：千円）

①経常的収支の部（人件費支出、物件費支出、地方税収入、交付税収入等）	
支出合計 (A)	6,887,715
収入合計 (B)	10,270,602
経常的収支額 (C)=(B)－(A)	<b>3,382,887</b>

②公共資産整備収支の部（公共資産整備支出、国庫補助金収入等）	
支出合計 (D)	2,872,755
収入合計 (E)	1,905,524
公共資産整備収支額 (F)=(E)－(D)	<b>△967,231</b>

③投資・財務的収支の部（投資及び出資金支出、貸付金回収収入等）	
支出合計 (G)	3,254,119
収入合計 (H)	394,760
投資・財務的収支額 (I)=(H)-(G)	△2,859,359

当年度歳計現金増減額 (J)=(C)+(F)+(I)	△443,703
期首歳計現金残高 (K)	798,504
期末歳計現金残高 (L)=(J)+(K)	354,801

①経常収支額は3,382,887千円のプラスとなっている一方、②公共資産整備収支は、967,231千円のマイナス、③投資・財務的収支は2,859,359千円のマイナスとなっており、当年度歳計現金増減額は443,703千円のマイナスとなっていますが、前年度からの繰越金、798,504千円であったため、期末歳計現金残高は354,801千円となり、資金不足は発生していません。

## 6. 財務書類の分析

分析の視点	代表的な指標	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
将来世代に残る資産はどれくらいあるのか	住民一人当たり資産額 資産額÷住民基本台帳人口 <sup>※1</sup>	167万2千円	177万2千円	180万8千円
将来世代と現世代との負担の分担は適切か	純資産比率 純資産合計÷資産合計	65.8%	66.1%	67.1%
財政に持続可能性があるか	住民一人当たり負債額 負債額÷住民基本台帳人口	57万2千円	60万1千円	59万5千円
行政サービスは効率的に提供されているか	住民一人当たり行政コスト 純経常行政コスト÷住民基本台帳人口	32万7千円	32万7千円	33万5千円
資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	行政コスト対税収等比率 純経常行政コスト÷税収等 <sup>※2</sup>	95.1%	82.9%	91.8%

※1 住民基本台帳人口は平成27年3月31日時点での人口（26,875人）より算出

※2 税収等は純資産変動計算書の「一般財源」＋「補助金等受入」の合計